

山崎郷土叢書

NO. 140

令和5.2.20

山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町

大谷 司郎

戦争の遺跡 忠魂碑について (一)

はじめに

大谷 司郎

一昨年十月に静岡県袋井市で撤去されようとする忠魂碑を残そうと郷土史家らが保存運動を始めたとの記事が目に入った。山崎ではどのように残されているのか調べておきたいと思ったのが今回のテーマのきっかけである。袋井市ではすでに二カ所の忠魂碑が撤去され、戦死者の名前を書いた銅板だけを近くの寺に移設し、辛うじて残されたとのこと。

また、新たにもう一カ所撤去する話を持ち上がり、存続を求めて地元自治会と話し合い、忠魂碑の意義を説明した結果、当面の撤去を免れたという。背景にあるのは維持管理の難しさである。建立されたのは大正、昭和初期が多く、地元の帝国在郷軍人会がその設置者となっている。終戦後は地域の遺族会が運営管理に当たってきた例が多い。ところが戦後七八年が経って、遺族会の高齢化や世代の交代などで、同会の活動が停滞してきたことにより、忠魂碑の維持管理が困難になってきた。また憲法で示す政教分離の原則で、自治

目次

戦争の遺跡 忠魂碑について (一)	大谷 司郎	1
山崎闇斎先生と会津藩主保科正之	高井 淳	5
国・県の登録有形文化財の紹介	田路 正幸	7
地域伝承 山崎町門前『古屋前野家の由緒』	竹内 克司	9
山崎の美術の流れ(五)写真と美術協会の総括	伊藤 一郎	11
倉吉せきがね里見まつり	里見 亘	13
京都市知恩院の大梵鐘	片山 昭悟	17
会員・家族の文芸	22
事務局だより・編集後記	23

体からの補修等の助成ができないこともネックになっている。

私の居住している蔦沢地区では、数年前に地区自治会が忠魂碑周辺の樹木の伐採をして県道を通っていてもよく見えるようになってきた。それを機会に小学生のふるさと学習の見学コースの一つに入れている。「忠魂碑ってなに？」の質問に、先の戦争で当地からも多くの若者が兵隊として召集され戦地で亡くなられた。その戦死者が祀られていて、忠魂碑には家族や隣人・知人を亡くした地域の悲しみが詰まっていると伝えている。明治から昭和の戦争を感じられる地域の歴史的遺産であり、身近な平和学習ができる場としても保存していかなければならないと思っている。

忠魂碑は大正から昭和初期に多くが建立されている。建立の主体は当時の自治体ごと(山崎は八カ町村)に組織されていた帝国在郷軍人会の各分会である。

帝国在郷軍人会のこと

日本の徴兵制度の流れをみると、徴兵令が一八七三年（明治六）に制定され、つぎに一八八九年（明治二十二）大改正が行われ、その後一九二七年（昭和二）徴兵令の全文改正があり兵役法が制定された。国民皆兵制下の日本では、満二〇歳に達した成年男子は壮丁は徴兵検査を受けなければならなかった。

帝国在郷軍人会が発足したのは一九一〇年（明治四十三）で、日露戦争後であり、分会では地元の戦没者の慰霊をする招魂祭が主な取り組みであった。さて在郷軍人とはどのような人達かという点、徴兵検査の結果、甲種・乙種合格者（現役に適する者）の中から現役兵・補充兵が選抜され、もれた者は丙種合格者（国民兵役に適する者）とともに国民兵役に編入される。その国民兵役の者が会員となるから三〇〇万人を擁する大きな組織である。

甲種、乙種の中から現役徴集者は入営して三年間軍隊教育を受ける。退営後も予備役（四年四カ月）、後備役（十年）がある。通算一七年四カ月の服役である。年齢的には二〇歳から三〇代後半までとなる。

在郷軍人はこの予備役、後備役、補充役の者と四〇歳までの国民兵役の者をいうので地域でも中堅層の人達が在郷軍人会員である。在郷軍人会を通して軍部は総力戦を見据え拘束していたことになる。**忠魂碑のこと**

帝国在郷軍人会では、大正改元記念事業を各分会で始めるよう促した。その時、多くの分会が日露戦争の記念碑として忠魂碑を建てることを決め、流行のように全国に広がった。山崎町内の八つの忠

魂碑をみても半数以上が大正期のものである（四ページ一覽参照）。しかしその時期よりいち早く城下地区では一九〇七年（明治四十）に建立されている。各地区の特徴的な事項は紙面の都合で次号に報告したい。

遺族会の取り組み

宍粟市遺族会は旧町単位に四支部があり、その元に戦時下の旧町村単位の一五分会がある。同会では二〇一二年（平成二十四）に市内に現存する忠魂碑の傷み具合などの現況調査を実施している。各分会から報告された一五基のまとめが市社会福祉協議会で一冊の冊子にまとめられている。その時点では特に倒壊の恐れがあるので早期の修繕を必要というような碑はなかったものの欠損個所の補修を要する碑はあったとのこと。しかし、各分会構成員の高齢化が進み、補修すら覚束ない状況になっている。その上に、世代交代により関心が薄らぎ、今後の維持管理に大きな課題を投げかけている。

二〇〇一年（平成十三）、山崎町遺族会が山崎町内八地区の戦死者、戦病死者、戦災死者の名簿を浄書した巻物三巻を作成している。またそれを収納する厨子も作っている。現在山崎町御名の西光寺に保管されていて、今回、村上義円住職と遺族会役員の井上隆溥さんにご協力いただき巻物に記されている戦没者数一一八三名を確認することができた。ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

【参考文献】

『在郷軍人会』藤井忠俊

『徴兵制』大江志乃夫

『宍粟市内忠魂碑現況調査』宍粟市遺族会

『飛翔 百年誌』城下小学校百年誌実行委員会



山崎地区忠魂碑



城下地区忠魂之碑



戸原地区忠霊塔



河東地区忠魂碑



神野地区忠魂碑



葛沢地区忠魂碑



土万地区忠魂碑



菅野地区忠魂碑

山崎町内忠魂碑設置状況一覧

地区名	石碑名称	設置場所	設置年月日	設置者	揮毫者	参考事項
	戦死者等人数					
山崎	忠魂碑	山崎町門前 山崎八幡神社 敷地内	大正8年4月 (当初) 昭和36年5月 (現在地)	帝国在郷軍人 会山崎町分会 山崎町戦友会	元帥陸軍 大将子爵 川村景明	当初は山崎町鹿沢 現市立図書館 の地に設置 その後八幡神社へ 移設、昭和36年に山崎町戦友会 が補修したと石碑に有
	318					
城下	忠魂之碑	山崎町御名 西光寺墓地内	明治40年6 月除幕式 (城下小百 周年記念 誌)	地元建設 委員	元帥侯爵 山縣有朋	昭和58年の西光寺墓地整備時に 現在地に移設 西南戦役、日露戦 役、台湾守備服務中等の忠死士氏 名没年月日の陰刻有
	157					
戸原	忠霊塔	山崎町宇原堰 山357-1 戸原小学校東 山裾	昭和16年 12月除幕 式(戸原小 百周年記念 誌)	戸原村在 郷軍人会 同軍友会	陸軍大将 男爵 本庄繁敬	ブロック型切石を積み上げた もの 各切石面に戦没者名陰 刻(日露戦争～太平洋戦争の 没年月、階級有)
	78					
河東	忠魂碑	山崎町神谷 河東小学校敷 地内	大正14年4 月22日 除幕式(河東 小沿革史)	帝国在郷 軍人会 河東分会	陸軍大将 子爵 川村景明	裏手の石碑板に約100人の寄 付者名が陰刻された石碑有
	150					
神野	忠魂碑	山崎町田井645 神野小学校よ り北へ150mの 山裾	大正12年		元帥陸軍 大将子爵 川村景明	忠魂碑と同敷地に「征清紀念 之碑」と征清従軍者12名の階 級氏名が陰刻された石碑有
	136					
蔦沢	忠魂碑	山崎町上牧谷 (岩上神社鳥居 南隣)	大正10年5 月	蔦沢分会	元帥陸軍 大将 川村景明	忠魂碑と同敷地に栗田村長 (第7代栗田喜平村長)頌徳碑 が有
	150					
土万	忠魂碑	山崎町塩山 元土万小学校 体育館南隣	昭和7年4 月		陸軍大将 鈴木莊六	土万小閉校記念誌『あかさ か』に昭和7年忠魂碑建設と 有
	68					
菅野	忠魂碑	山崎町青木 山崎西小学校 運動場南隣	昭和8年盛 春	帝国在郷 軍人会 菅野分会	陸軍大将 鈴木莊六	菅野小百年史には昭和8年の 項に建設作業に参加する、忠 魂碑除幕式を行うと有
	126					

戦死、病死、戦災死者計1,183名

* 西光寺保管の戦死者等名簿・巻物3巻より拾い出し

山崎闇齋先生と会津藩主保科正之

高井 淳

はじめに

山崎闇齋先生（一六一八～八二、以後闇齋という）は祖父が宍粟郡山崎村出身の江戸時代の儒者です。闇齋は京都で生まれ、十五歳で妙心寺の僧になり、十九歳で土佐吸江寺（ぎゅうこうじ）に行きましたが、儒学が目覚め、二十五歳のとき京都に戻り還俗しました。

闇齋は、赤貧の中で儒学の研究に没頭し、多くの書物を出版し、三十八歳で家塾を開きます。そして、四十一歳（一六五八）の時初めて江戸に入り、井上正利や加藤泰義などの大名に講義をし、次第に名声は高まります。以後、闇齋は十六年間で十五回、京都と江戸を往復します。江戸に進出してから八年目（一六六五）に会津藩主保科正之（一六一一～七二、以後正之という）に賓師（ひんし）として招聘（しょうへい）し、丁重に招くこととされます。以後七回江戸に行き、正之の箕田（三田）の下屋敷で講義を続けました。（註①）

この正之との交流は闇齋にとってどんな意味を持つのでしょうか。保科正之とはどんな人物だったのか

正之は徳川幕府二代将軍徳川秀忠の四男として生まれましたが、不幸にも父子の対面はなく、正之は信濃高遠藩二万五千石の保科正光の養子に入り高遠藩を継ぎます。その後、兄である家光が三代将軍になると重用され、山形藩二十万石の後、二十三万石の会津藩主になり、御三家に次ぐ重要親藩の大名になります。

家光からの信頼は厚く、「託孤の遺命（家光から家綱を頼むとの遺言）」を受けた正之は、家光没（一六五二）後、十一歳の四代将軍家綱の後見役として幕政の中で補佐します（註②の1）。しかし、「正之の存在を決定的に重要なものとした契機は、譜代筆頭の井伊直孝の死であった」（註②の2）と小池進氏は述べています。つまり、一六五九年のあたりからと言えます。

正之は、水問題では玉川上水開設（一六五四）をし、明暦の大火（一六五七）では火事の後の江戸の復興に尽くし、天守閣再建問題でも、民衆中心の施政をすすめました。また家綱政権の「三大美事」と言われる末期養子の禁の緩和（一六五一、註②の3）、殉死の禁止（一六六三、註②の4）、大名証人制度の廃止（一六六五、註②の5）の内、後の二つについては、特に大きく関わっていたと小池氏は書いています。正之にとって最も重要な事は、四十二歳（一六五二）の時に、朱子の『小学』を読んで為政者の道を儒学（朱子学）に見出したことです。そして家綱に君主の心得を体得させようとして、幕府番医師で儒者の土岐長元に編纂させたのが、『輔養編』という書物です。これは、武断政治から文治政治へと転換させる契機になりました。

正之は元来、体が丈夫なほうではなく長年の無理がたたったのか、一六六一年、眼病（白内障）にかかり翌年には、三回も吐血しました。家綱に致仕を願い出しましたが、不定期な登城でも良いからと許されませんでした。

闇齋は正之に賓師として招聘される

一六六五年、正之は闇齋を招聘し、『論語』の講義を受けます。以後は、四書の講義です。翌年の『中庸』の講義の時は、水戸光圀

や井上正利にも聞かせました。その年の内に、四書の講義を終えます。その七年後の一六七二年に正之は亡くなりますが、直前に『近思録』を終えています。前田恒治(註③の1)氏は「闇齋が正之の招聘を受けたのは、臣下として仕えたのではなく、所謂賓師として、他の儒臣とは異なる特別の礼遇を受けたのである(註③の2)」と、そしてまた、闇齋の席は家老よりも上座だったことについて「儒者を国老の上に班した(席次を決める)ことは当時としては異数の待遇である(註③の3)」と述べています。

また、「闇齋が正之の為に尽くした事跡の顕著なもの一つは、正之の書物編纂事業に参画したことであろう(註③の4)」と言います。闇齋はそれらの書物の撰文にかかわり、序と跋(ばつ・あとがき)も書いています。正之は『玉山講義附録』・『二程治教録』・『伊洛三子伝心録』・『会津風土記』・『会津神社誌』などの書物を編纂していました。とくに会津では五部書と呼ばれ尊重された書物でしたが、なかでも前三者は会津三部書と呼ばれ、朱子学の専門書でした(註②の6)。江戸時代にこれだけの重要書物を刊行した大名は正之だけでした(註②の7)。さらに、闇齋は「会津家訓十五條」も添削をしています。

また正之は吉川惟足を賓師として招聘しており、神道について研究をしていた闇齋もその講義を受けます。神道と儒学の一致である「垂加神道」を完成させるきっかけになったとも言えます。正之と闇齋の出会い、お互いの名声をさらに高めることになっていくのです。

山崎闇齋神社にある「楷の木」とパネル

山崎闇齋神社の境内に入って左手南側に樹齢約三十年、幹周八〇センチ、樹高約六メートルの「楷の木」があります。これは一九九二年に、闇齋学の泰斗岡田武彦九州大学名誉教授(一九〇八―二〇〇四、姫路市出身)が、会津藩校日新館から贈られた「楷の木(孔子の出身地、中国曲阜から送られたもの)」の苗を植樹されたものです。これは元山崎闇齋研究会員の竹添和彦氏から、当時山崎闇齋奉賛会長の松岡三郎氏を通じて話があり、実現したものです。奉賛会の方がつねに手入れし、良く育っています。

また会津の土津(はにつ、正之が祀られている)神社にある巨大な「土津霊神之碑」には、闇齋が撰文した一九四三文字の碑文が刻まれていて、正之の事績の数々を今日に伝えていきます。六粟市で催しのある時は、研究会が作成した十三枚の闇齋に関する写真パネル(B2サイズ)を、闇齋神社内で展示・説明しています。その内の三枚は、「土津霊神之碑」とその「碑の説明」、そして正之も含む「崎門学派の系譜(故本條衛研究会名誉会長作成)」です。前述の「楷の木」と共にこの三つのパネルは正之と闇齋と神社の繋がりを感ぜさせます。

最後に、この小論について、研究会顧問の鎌田裕明氏に資料・アドバイスを頂きました。心よりお礼申し上げます。

註①澤井啓一『山崎闇齋』。②の1小池進「保科正之」一五〇頁。②の2小池進『前掲書』一七七頁。②の3小池進『前掲書』一五〇頁―一五六頁。②の4小池進『前掲書』二〇八頁―二二六頁。②の5小池進『前掲書』二三四頁―二三七頁。②の6小池進『前掲書』二四八頁。②の7小池進『前掲書』二五〇頁。③の1前田恒治『会津藩に於ける山崎闇齋』。③の2前田恒治『前掲書』二五頁。③の3前田恒治『前掲書』二八頁。③の4前田恒治『前掲書』四七頁。

国・県の登録有形文化財の紹介

田路 正幸

一、登録有形文化財とは

宍粟市には、国指定重要文化財の御形神社本殿をはじめ、県指定、市指定を含めた指定文化財が一一四件所在しています。これらは文化財保護法、兵庫県・宍粟市の文化財保護条例で、それぞれ区域内に所在する文化財のうち「重要なもの」を「指定」して、その保存と活用を図ろうとするものです。

一方、登録有形文化財とは、指定文化財以外の文化財のうち、「その文化財としての価値にかんがみ保存及び活用のための措置が特に必要とされるものを文化財登録原簿に登録」（注1）する国及び県の制度です。ここでは、宍粟市内で最新新たに登録された国・県の登録有形文化財について紹介することとします。

二、国登録有形文化財 中門前屋主屋

中門前屋主屋は、山崎町山崎字西新町に所在し、通称「酒蔵通り」に南面する町家建築です。通りの南北には、東から山陽盃酒造、老松酒造の店舗や酒蔵が建ち並び、山崎地区の中でも城下町の雰囲気の良い店を残している一画です。中門前屋は、南向いの本家門前屋、東隣の北門前屋（老松酒造）とともに江戸時代より酒造りを営んでいましたが、後には醤油の醸造に転じたということでした。

主屋の構造は、切妻造二階建ての平入、屋根は棧瓦葺きとしてい

ます。屋内は東側に通り土間、西側に二列六室の部屋を配し、北側の背後には平屋の台所棟が突き出しています。正面には下屋を付し、玄関戸口の両脇に出格子を備え、二階は三か所の窓に平格子を入れてあります。外観の印象は、間口が大きく軒裏まで漆喰塗りで仕上げた伝統的な商家にふさわしい重厚な構えとなっています。この建物は、同家に伝わる史料によって、江戸時代末の嘉永四年（一八五二）に建てられたことが分かっています。

本家門前屋・中門前屋・北門前屋（老松酒造）・山陽盃酒造は、城下町山崎の歴史を物語る貴重な建造物であり、いずれも兵庫県の景観形成重要建造物に指定されていますが、このたび中門前屋主屋が国の登録基準である「国土の歴史的景観に寄与するもの」（注2）として、令和三年十月十四日に宍粟市では初めての国登録有形文化財となりました。主屋の内部は令和元年に改修され、現在は町家旅館として活用されています。

三、兵庫県登録有形文化財 山崎歴史民俗資料館（旧龍野治安裁判所山崎出張所）

山崎歴史民俗資料館は、山崎町鹿沢字本多町に位置し、山崎小学校の西隣、江戸時代に山崎藩陣屋が置かれた場所にあります。元は山崎町門前に、明治二二年（一八八九）、龍野治安裁判所山崎出張所として建築され、後に法務局の庁舎とされました（注3）。その後、庁舎の建替えに伴い、昭和四九年に現在の場所に移築され、山崎歴史民俗資料館として開館しました。

建物は、南北の長さ十一間（十九・八m）、東西の幅四間（七・

二m)、木造の平屋建て、屋根は寄棟造で棧瓦が葺かれています。東側の正面玄関部には来庁者の車を着ける車寄せを設けています。

正面玄関を入ると中央の廊下を挟んで、向かって右側に応接室、宿直室、審廷(裁判を行う部屋)、白洲(裁判を受ける人が控える場)

を配し、向かって左側には正庁(広間)、登記受付、閲覧室、人民控室があります。裁判所の出張所であった時、審議は審廷・白洲で行われていたようですが、開設一年ほどで裁判は行われなくなり、その後は不動産登記所として使用されていました。審廷・白洲は一続きの部屋となっており、境には段が設けられています。正庁は三間(五・四m)×四間(七・二m)の広さで、登記受付と人民控室の間には片引きの小窓が設けられ、ここを窓口として登記事務が行われていたと考えられます。建物の内部は、漆喰壁、細長い板を張った天井、土間敷きの人民控室以外の部屋の床は板張りとなっています。

山崎歴史民俗資料館は、地方における近代司法の施設を今に伝える貴重な建造物で、県の登録基準の「造形の規範となっているもの」として、令和四年二月十七日に兵庫県登録有形文化財となりました。

四、登録有形文化財の保存と活用

中門前屋と山崎歴史民俗資料館がある一帯は江戸時代の山崎城下町の範囲に含まれており、地域の歴史を継承した景観まちづくりを推進するため、令和元年に兵庫県の歴史的景観形成地区(注4)に、翌二年には兵庫県重点文化財活用地区に指定されています。地区内には他にも歴史的な町家や社寺などの建造物が多く残されており、

地域の貴重な歴史遺産として、観光振興や地域学習、地域づくりに
おける活用が期待されるところです。

注1 文化財保護法第五七条、兵庫県文化財保護条例第十九条の二

注2 文化庁『建物を地域と文化に―登録有形文化財建造物制度のご案内』

二〇一五年

注3 織金義雄『明治の白洲―山崎』『山崎郷土会報』第五二号 一九七八年

注4 兵庫県『宍粟市山崎町山崎地区歴史的景観形成地区景観ガイドライン』

二〇二〇年



中門前屋主屋



山崎歴史民俗資料館

地域伝承 山崎町門前「古屋前野家の由緒」

竹内 克司

はじめに

郷土の歴史に興味を持ち始めてこのかた十数年になります。歴史を求めていると不思議と何かしらの手がかりや情報が手に入ることが少なくありません。このほど灯台下暗しそのもので、近くで貴重な情報を入手することができましたので、それを紹介したいと思います。

古屋前野家の由来

宍粟市山崎町の市街地西端に位置する門前地区に「古屋」という屋号をもつ前野家に伝わる由緒・記録が残されていることがわかりました。明治時代に書かれたと思われる難解な原文ですが、読み下しを加えています。その後、それに関連する由緒、墓碑文、戒名記録を載せています。

【由緒が記された原文】

君諱久三郎前野氏宍粟郡門前村人 考曰助右衛門君其嫡男也
家世業農蓋其先奕業 累世至君之時不幸罹回祿舊記焚失其詳不可知也 天正中羽柴氏攻長水城助右衛門為鄉導而有功賜賞典焉 君承家為本村里正勤儉率下頗有治績闔村服其化矣

元禄十四年五月二十二日歿享年八十有一 有五男長曰彌右衛門分家營農 二曰仁兵衛別起家業 商稱大阪屋 三曰重兵衛承家 四曰

五右衛門 五日治右衛門 亦復分家 各事商賣面曰門前屋 曰五日
佐渡屋皆稱前野氏云 重兵衛以後 為里正至傳四郎 明治維新之際
為副戸長試補 亦有能吏之稱 即當主柳吉之老也 初葬君於門前
村 中世有故 移墓碑於上寺村妙勝寺 及傳四郎 承家恐榮域之荒
廢 復於故土 方今前野一族 益滋殖及十有四戸焉 抑欲垂其事
歷於後 與同族胥謀 乃鐫貞眠以圖不朽 且係以銘曰
齡踰八旬 五男麟振 或農或商 各立其身 宗族繁衍 榮名無垠

【読み下し】

あなたのいみな（本名）は久三郎という。前野の氏（姓）である。
宍粟郡門前村の人である。亡父は助右衛門といい、あなたはその嫡男である。

家は代々農業で、おそらくその前は奕業（占いか）であろう。あなたの前の時代に不幸にも火災をこうむり、古記録を失った。そのため詳しい内容は知ることができなくなった。

天正時代に羽柴（秀吉）氏の長水城攻めに、助右衛門が道案内をして、功を立て、賞を授かった。あなたは家を継ぎ、村長（門前村）となり勤勉で、おおいに成果を残し、村を発展させた。

元禄十四年五月二十二日、享年八十一である。五男あり、長男は、弥右衛門といい、分家して農業を営む。次男は仁兵衛という。これもまた分家し、商売を仕事とする。商いを大阪屋と称した。三男は重兵衛といい、家を受け継ぐ。四男は五右衛門という。みな前野氏を称すという。

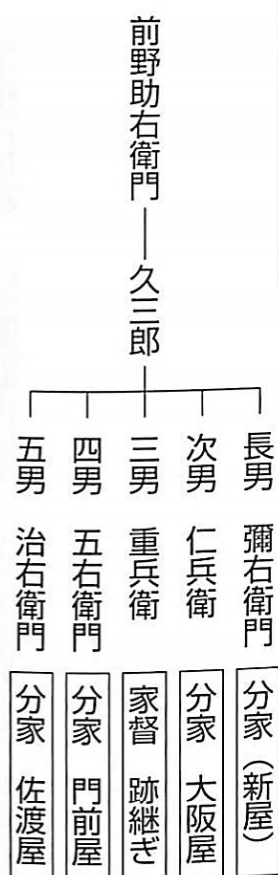
五男は治右衛門といい、分家を復し、各々商売を家業とする。面（屋号）は門前屋という。

重兵衛以後、村長となり、傳四郎に至る。明治維新の際、副戸長
 試補となり、また能吏の称を受けた。それは当主柳吉之老であった。
 初めあなたを門前村に葬り、中世に故ある墓碑を上寺村の妙勝寺に
 移した。傳四郎におよび、家を継ぎ栄域の荒廢を恐れ古い土地に復
 した。今日前野一族 ますます繁榮し十四戸に及んでいる。その事
 歴を後に残さんと欲して同族互いに貞眠に鐫（こく）し不朽をはか
 る。かかるに銘をもつて曰く、齡（よわい）は八旬をこえ、五男は
 勢いよく 或るは農業、或るは商業につき、各々其身をたて、宗
 族繁榮し、榮名は限りがない。

古屋（宗家 前野家）墓碑文

先祖ノ墓碑小而 粗加之累代墓碑 各所ニ散在シ為 後代認識ノ
 難有り 七代宗家前野柳吉 大正十二年正月更ニ此碑ヲ建ツ 久三
 郎門男子五人 長男彌右衛門出ノ渡辺姓襲ノ後前野姓俱ス新屋是也
 次男五右エ門分家門前屋是也 三男仁兵衛分家大坂屋是也 四男十
 兵衛宗家を襲フ 五男治右エ門分家佐渡屋是也

古屋前野家略系図



先祖からの戒名記録

室町時代の寛正元年（一四六〇）から平成十六年（二〇〇四）ま
 で八十八名の戒名記録が過去帳に残されている。（一五〇〇年代大
 火事のため不明）

古屋前野家から生まれた『門前屋』、『大阪屋』、『佐渡屋』

以上のように、宗家の面々の記録によって一族が地域に根を張っ
 ていったことは、まぎれもない事実と認識できます。

ここで、古屋という屋号は、どこから生まれたのか。古屋宗家は、
 広い土地を所有していたと聞いています。門前の字限図には、八幡
 下から西に延びる五〇mほどの場所が宇古屋敷とあり、この古屋の
 屋号はこの地名からのものではないかと考えられます。古屋前野家
 の由緒書に羽柴秀吉の播磨攻めで、最後まで抗った宇野攻めるとき、
 その道案内をして褒美をもらったことを一族の誇りとして残してい
 ること。古屋前野家では先祖は尾張（名古屋）ではないかと伝わっ
 ています。そして、一族の大阪屋の家紋は円に卍で、蜂須賀家の家
 紋と同じです。蜂須賀小六正勝は宇野攻めに加わっています。こ
 のことと関係があるのか。いずれにせよ、古屋前野家から派生した
 一族は、江戸時代を通じて門前屋、大阪屋、佐渡屋等が生まれ現在
 に繋がっています。

終わりに

古屋前野家中世・戦国時代から現在までの伝承は、門前を基盤
 とした古屋前野家から発した一族が今なお地域に根付き地域形成の
 一端を担ってきた歴史でもあることを知ることができました。

史料提供 古屋前野家前野考司氏、前野明夫氏

山崎の美術の流れ(五) 写真と美術協会の総括

伊藤 一郎

写真部のこと

本会報一三八号に続いて山崎美術協会写真部を振り返ります。写真部の発足は、中央で活躍されていた河東地区高所出身の衣笠正さんの帰郷から始まります。彼の指導の元、山崎写真倶楽部を発足されたのが、北魚町で仕出し屋をされていた志水祐助さんです。十数名の会員で、モデル撮影会や研修会を開催され、志水さんの自宅には白黒の大型現像機を設置し、大きな写真を引き伸ばすことが出来ました。山崎写真倶楽部の面々は、県展で入賞・入選を度々し、山崎町展・龍野市展・姫路市展などで入賞・入選を果たし活躍されました。しかし、衣笠・志水両氏が亡くなられ写真部は低迷しました。後を継いだのが、十一月展で活躍された柳田邦夫さんです。十一月展には、写真では樽岡写真館の樽岡敬介、洋画では土方研三、陶芸では富和孝・出口郁子、書道では山部一翠、鉄の立体作品ではくろみ工芸の松尾文夫の各氏等が活躍されました。

山崎美術協会では、五十周年記念事業のパンフレットを制作された三浦敏男さんです。記念事業後に三浦さんが亡くなられ、後を引き継がれたのが、ポトサロン禅の長井利之さんです。長井氏も健康を害されているので写真部の継続がなされるのか心配しています。

美術協会のこと

美術協会の戦後の流れは、昭和二十四年(一九四九)に伊藤親保による山崎美術同好会の結成から始まります。その後、昭和四十三年(一九六八)に山崎美術協会が同氏を事務局長として発足させます。当時の会長は安富町の小林善太郎・各部のリーダーは書道が教育長の尾崎正一・洋画が福岡久蔵・日本画が片山吉恵・陶芸が友澤路風・漆芸が武野金霞の各氏を中心として各教室の先生方を役員に発足しました。その当時、山崎さつき祭りが山崎小学校校庭などで盛んに開催されていました。第一回の美術協会展は、さつき祭り協賛事業として山崎中学校体育館にて開催され、多くの方々に鑑賞をいただきました。さつき展は、さつき祭りの消滅とともに亡くなりましたが、山崎美術協会展は継続され、平成三十年に五十周年記念展を開催しました。歴代会長は初代小林善太郎に始まり、本条猛二・伊藤親保・友澤路風・小川登・福岡久蔵の各氏でした。

次に宍粟美術協会ですが、創立は昭和四十九年(一九七四)です。この年に神戸のそごう別館三階に兵庫県民相談室があり、そのスペースに展示会場が併設されました。県より宍粟郡としての展示を求められたので山崎美術協会会長であった伊藤親保氏が宍粟郡内の美術活動家に呼び掛け発足したのが宍粟美術協会です。第一回の宍粟美術展は、私も協力して作品の搬入をし、展示したことを思い起こします。平面作品が中心と成り、洋画・日本画・写真・書道等を展示しました。当時宍粟郡内では、日展作家として書道の山部桂翠先生と山部一翠先生が活躍されていたうえ、前衛書道で活躍されていた田内龍陽先生の一門もあり来訪者の書道への評価は絶大でした。宍

粟美術協会も令和六年に五十周年を迎えます。

うれしいことに今日では、日展に何度も入選され特選にも輝いた洋画の志水和司先生・書道の牧野聖雲先生らが活躍されています。牧野先生門下は多数の日展作家を輩出しています。会員の中では日本画の中上泰三・洋画の福岡久蔵・書道の寺村舟裕各氏が日展に入選されています。中央の団体に挑戦されている方々もおられます。私も二十代の頃洋画で現代美術家集団に挑戦していました。山崎美

山崎美術協会五十周年記念展パンフレット

山崎美術協会 50周年記念展

とき 平成30年6月15日(金) 13:00～6月17日(日) 16:00

ところ 宍粟防災センター 5Fホール

- 主催 山崎美術協会
- 後援 宍粟市・宍粟市教育委員会・神戸新聞社



〈大皿〉 山井 山陽



〈陶器絵物〉 武野 金霞



〈静物〉 伊藤 親保



〈木の葉天目抹茶碗〉 友沢 悠風



〈水門〉 田路 幸子



〈早苗田の頃〉 三浦 行子



〈与位の洞門〉 伊藤 一郎



〈芍薬〉 丸井 眞子



〈与位の洞門〉 中村 かな子



〈小茶野もみじ橋〉 福井 正行



〈あじさいの庭〉 山根 幸代



〈庭しの森〉 小川 洋子



〈菖蒲〉 竹内 さだ子



〈百つ〉 前井 かずや



〈安積のさくら〉 目叶 高雄



〈森の隠れ家〉 山下 悟



〈与位の洞門〉 碓氷 好子



〈千種川せせらぎ〉 多田 多恵美



〈春來〉 藤原 義弘



〈雲津の路地〉 西江 美恵子



〈深い時の流れ木曾路〉 寺本 三枝子



〈里山の新緑〉 大部 輝美



〈ガード下の店〉 志賀 祐



〈ノートルタムの秋〉 福岡 久蔵

術協会と宍粟美術協会のメンバーが重なっていることから令和三年に統合し、宍粟美術協会として発足することとなりました。両方の代表が福岡久蔵先生だったのでスムーズに運びました。平成四年からは私伊藤が引き継いでいます。美術の流れをしっかりと受け止めて、次の世代に渡していこうと思います。これをもって山崎（宍粟を含む）の美術の流れを終わることとします。

倉吉せきがね里見まつり

里見 亘

毎年八月に、鳥取県の関金町（現倉吉市関金町）役場から祭りの案内状が届く。

祭りの名称は、「せきがね里見まつり（現在は倉吉せきがね里見まつり）」といい、「関金町ふるさと活性化実行委員会」と「せきがね里見まつり実施委員会」が共同で実施している。

（現在は、所管は倉吉市地域づくり支援課。実施はせきがね里見まつり実施委員会である）。

初めて、私にこの祭りの案内が来たのは、平成六年八月初旬であった。案内状を読んでもみると、おおむね次のようなことが書いてあった。

「安房国館山（今の千葉県館山市）城主里見家十代安房守忠義は、夫人の祖父大久保忠隣的事件に関わりがあったとして、慶長十九年（一六一四）、伯耆国倉吉に流され、元和八年（一六二二）六月に久米郡堀村（現在、関金町大字堀）において、二十九歳の若さで死去した。今も、関金町には主従の廟がある。

町民としては、悲運の武将といわれてきた忠義公の心中に強くひかれ、関係諸団体と一体となって、忠義公の供養と祭りを実施する。」この祭りが始まったのは昭和五十九年というから、いわゆる「村起し」の一種であろう。

祭りのプログラムは、

一、里見忠義主従之廟で神事

二、山守小学校体育館で「せきがね里見祭り」

* 吟と舞 忠義公主従の供養のため作詞した漢詩による

舞踊劇

* 子供歌舞伎「南総里見八犬伝堀村館勢揃ノ場」

* 八賢士太鼓愛好会による「八賢士太鼓」の演奏

* その他

三、里見一族歓迎交流会 町内国民宿舎

となっている。

祭りの趣旨は理解できたが、なぜ、突然私の所に案内状が来たのか分からなかった。私の姓は「里見」に違いないが、元館山城主の里見家と何らかの関わりがあるとは、とうてい思えない。若いころ、滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』を読んだことがあり、安房国に里見という大名がいたことは知っていたが、我が里見家と結びつけて考えたことはなかった。

いざ案内を受けると、ヘウチは関係ないで〜と思いつつも、行ってみたい気がした。家内に話すと、大いに関心を示し、「行きましよう、行きましよう」と旅館を予約してしまったので、祭りに参加することになった。

関金町を訪れるのは初めてで、近くに蒜山、遠くには大山を望む静かで緑豊かな町であった。里見一族として参加した者は、私たち夫婦を加えて四十九名。せきがね里見まつり実施委員会の役員の家

内でバス二台に分乗して、神事の行われる里見忠義主従之廟と祭りの行われる山守小学校とを回った。

里見忠義主従之廟は、「祠」と言った方が適切だと思っほほど小さなもので、土台も入れて二メートルにも満たない。廟の前で厳かに神事が執り行われ、終わると山守小学校へ向かう。

小学校の体育館には、地元の人たちがかんりの人数集まっておられたが、大半が出演者の関係者のようて、盛況というほどではなかつた。

プログラムにある「吟と舞」は、町内の詩吟や舞踊の同好会の方々が演じられる舞踊劇。死去した忠義公には遺児があり、家臣に守られて土佐国へ落ち延びる物語である。現在も、高知県には、三十数戸の里見姓を名乗る人たちが住んでおり、その結末は固いという。

「子供歌舞伎」は、小学校の児童たちが演じる。八犬士が堀村の館に集合して、それぞれが歌舞伎の『白波五人男』張りの口上で、自己演じる犬士の経歴を紹介するという筋立のもの。

「八賢士太鼓」は、忠義の死後三月目の命日に殉死した、八人の忠臣の霊を慰めるために作られたものである。「八賢士」と書くのは、殉死者のすべての戒名に「賢」の字が使われているからである。演技はどれも執演で、心を動かされる場面も多かつた。

祭りが終わると、町内の国民宿舎へ移動、「里見一族歓迎交流会」が始まった。

交流会の前半は総会で、全国里見一族交流会長の経過報告を兼ねた長い話があつた。会長は、八十歳前後の小柄な人で、一刻者といった風貌の人物であつた。

*この会は、最初は東京周辺の者が集まって始めたが、全国組織を作る必要性を痛感して、全国里見一族交流会を作つた。

*この度新たに案内状を出した人は、電話帳などで調べた。

*里見家は、清和天皇までさかのぼる清和源氏の一系統である。

*家紋は「二引両」であるが、代表紋として清和天皇の流れを示す『十六弁菊花紋』がある。里見一族は、この菊花紋を使うことができる。

*組織の拡張充実を図るために協力願いたい。

などが、会長の話の内容である。

総会が終わると懇親会に移り、賑やかに宴会が始まった。私は、本当に安房里見家と繋がりがあるのかどうか、またここに集まっている里見一族と同族なのかどうか、何か手掛かりを得ようと、積極的に多くの人と杯を交し話をした。

房総里見氏とは

里見氏は、清和天皇から始まる源氏の新田氏一族から分家したもので、その祖は里見義俊で上野国碓氷郡里見郷（群馬県高崎市榛名）を拠点に長い間活動していたとされる。

その後、その里見一族は各地美濃・陸奥・常陸等に進出。房総里見氏は、里見義実が安房白浜に乗り出したことが始まりという。時は千四百年代半ば、室町時代後期の頃である。

安房進出後は、安房国や上総国の覇権をめぐつての乱世をくぐり抜け、第六代義堯は子息義弘とともに里見氏の全盛期を築きあげた。豊臣秀吉の北条攻めの頃は、安房・上総・下総を領有していたが、

秀吉の命令を受けずに三浦半島で北条軍と一戦を交えてしまったため「惣無事令」違反に問われ、安房一国に減封されている。

第九代義康の時に、関ヶ原の戦いで徳川方にあつて下野宇都宮に出陣し、常陸国鹿島郡（茨城県）三万石を加増され、安房と合わせ十二万石の大名となり、関東では最大の外様大名に成長した。

なお、里見氏は、三浦半島はもちろん鎌倉方面に度々出陣しており、これは義実の時代から、水軍をもつ安西氏・正木氏・神余氏・丸氏・東条氏などの武士集団を配下に収め、里見水軍として東京湾の制海権について優位な地位を保つていたためと考えられている。

安房里見氏の終焉

安房里見氏十代里見忠義は、文禄三年（一五九四年）安房館山藩主であった里見義康の長男として誕生し、幼名を梅鶴丸と名乗った。

慶長八年（一六〇三年）、父・義康の死（三十一歳）により、十歳で家督を相続する。

慶長十一年（一六〇六年）十一月十五日に、江戸幕府二代将軍・徳川秀忠の面前で元服し、一字を賜わり忠義と名乗ることになった。また、従四位下・安房守に叙任され、十二月二日には侍従に任ぜられている。

慶長十六年（一六一一年）には忠義は老中大久保忠隣の子孫を娶った。その他にも忠義の叔母（父の妹）である光性院殿が徳川家康の外孫にあたる松平忠政のもとへ嫁いでおり、外様大名である里見氏としては、徳川譜代の重臣である大久保氏、さらには徳川氏との繋がりをつくり、お家の安泰を圖ろうとしたと思われる。

慶長十九年（一六一四年）九月九日、重陽の賀儀を述べるため幕府に出仕しようとして江戸屋敷にいた忠義のもとに將軍忠秀の使者

が訪れ、安房国は没収、（家康が与えた）鹿島三万石の替地として伯耆国に三万石を与える旨の言渡しを受けた。しかし領地替えとはいつても三万石というのは表向きだけで、実際はわずか四千石しか与えられず、その処置は改易とほぼ同等なものであったという。

この改易同様の処置の主たる理由は、「大久保忠隣に加担した」とで、忠隣の孫婿であることによる連座であった。大久保長安事件で失脚した忠隣の余波が忠義にまで及んできたのである。その他の理由として「剩城郭を修理して要害を構へ、過分に牢人を抱え置きし条」が挙げられている。

なお、忠義に対する処置の理由については異説がある。

それは、安房という土地の立地条件が里見氏に災いをしたという説である。すなわち、房総半島の先端にあつて江戸への海路の入り口にある安房は、軍事的にも経済的にも海上交通の要衝であったので、江戸の近くに残った大きな外様大名である里見氏は邪魔な存在であった。だから、大久保忠隣の失脚を奇貨として利用したというものである。

忠義は九月末に安房を出発し、同年十二月に伯耆倉吉に到着する。倉吉の神坂（現在の倉吉市東町）に屋敷を与えられたが、幕府代官山田五郎兵衛から引渡されたのは久米・河村両郡のうち四千石であった。

元和三年（一六一七年）三月六日に池田光政が播磨姫路藩から因幡国・伯耆国に移封になった際、伯耆倉吉は家老伊木長門守忠貞（十

歳)の管掌となった。

忠義は下田中村(現在の倉吉市下田中)に移され、四千石の所領は召し上げられて、わずか百人扶持となる。さらに、元和五年(一六一九年)には堀村(現在の倉吉市関金町堀)という山間の地に移されている。

元和八年(一六二二年)六月十九日に里見忠義は病死(自死という説もある)する。行年二十九歳であった。

忠義には嗣子なしと認定され、安房里見氏は忠義を最後に断絶することとなった。(しかし、実は側室との間に三人の男子を儲けていたとする話が残っている)。

なお、忠義の三カ月後の命日つまり九月十九日に、主君の後を追って近臣八名が殉死している。主従の墓碑、位牌は倉吉の大岳院にある。

『南総里見八犬伝』について

『南総里見八犬伝』は、江戸後期の戯作者曲亭馬琴が里見氏の歴史が幕を閉じてから二〇〇年を経た一八一四年(文化十一年)から創作を開始、二八年の歳月をかけて完結したものの。中国の『水滸伝』の構想を借り、『里見記』『里見九代記』などを参考に書かれた長編伝奇小説で全九八巻、百六冊の大作である。

忠義公が亡くなった時、館山藩時代から仕えていた家臣八人が殉死したが、主人・忠義公の戒名に「賢」の字が用いられていることに因んで、これら家臣の戒名の中にもそれぞれ「賢」の字が入って

いる。倉吉市関金町ではこれを「八賢士」と呼び、大岳院境内の里見家墓所の案内板や旧関金町堀にある里見忠義主従之廟の案内板、倉吉せきがね里見まつり公式サイトなどで里見八犬伝ゆかりの地として紹介している。

しかし、『南総里見八犬伝』の舞台となっているのは、安房里見氏の祖(初代)里見義実の時代(室町時代後期)であるし、曲亭馬琴が伯耆国倉吉へ取材に訪れたという記録も存在しないので、大方の見解はこれに否定的である。

安房里見氏ははたして我が家のルーツか？

一番気になるのは、家紋のことである。安房里見氏の家紋は「二引両」で、我が家の家紋は「丸に三つ蔓柏」で異なっている。

里見家の系譜に詳しくそうな老人にそのことを話すと、

「里見家は、清和源氏新田氏流といって、新田氏から枝分かれしている。里見を名乗る者の中には、新田の家紋である柏の紋を使っている場合もある。私もそうです」という返事が返ってきた。その自信たっぷりの話し振りに、私はただ頷くしかなかった。

結局、私が、安房里見家の一系統である、という確信を得られなまま交流会は終了した。

また、我が家の墓地は、自宅から五〇〇メートルほどのところにある小さな山の中腹にある。その墓地の墓石の建立年月を調べてみると、文字が読み取れるもので最も古いものは文化年間である(年月は読み取れない)。忠義公の死去から約一八〇年。我が祖先が忠

京都知恩院の大梵鐘について

義ゆかりの者であるとしても、その間あちらこちらと彷徨った末、この山崎町（旧菅野村）高下という土地に辿り着いて定住をし、初めて（と思われる）死者を埋葬したまでの歳月を繋げてゆくことはきわめて困難である。

片山昭悟

今私は、半信半疑というより「違うだろう」という気持ちの方が強い。だから、毎年案内状が届くが、出席はしていない。

それでも、心のどこかで忠義公に親しみを感じていて、「明石市内のお寺で里見忠義と妻子の石碑が発見された」などという新聞記事を見るとそこを訪れてみたり、高野山に参詣した折には、奥の院の近くに建立されている忠義公や夫人の供養塔に詣でたりしている。



義と殉死した家臣を祀る倉吉大岳院



義と殉死した家臣8名の墓

一 はじめに

わたしは、梵鐘について宍粟市の金屋鋳物師長谷川孫兵衛と五郎兵衛の鋳造した江戸時代の梵鐘について調査を行っています。

今から約五十年前になるが、金谷の古老に長谷川氏が京都知恩院の大梵鐘鋳造に参加したことを聞いた。数年後に京都知恩院の大梵鐘を調査したことについて書きと留めようと此の度紹介させていただきます。

京都知恩院の鐘については、奈良東大寺の鐘と京都方広寺大仏の鐘とともに日本の三大名鐘として知られています。

知恩院の大鐘については、今から三十一年前の平成四年（一九九二）に一度調査を行なったことがあるが、夜であり、暗やみのなか銘文までは調査できず、写真撮影をするまでには至らなかった。その後私は平成五年（一九九三）三月二十一日に京都市左京区東山の知恩院大鐘について詳しく冶工名なども調査する機会にめぐまれました。

この頃は、奈良時代の鏡、瑞雲双鸞八花鏡を調査していることから、梵鐘についての調査は宍粟郡の梵鐘調査を中心にしていた。

平成五年には、四月、五月、九月に山崎町梵鐘集成を『山崎郷土会報』の八十二号に発表し、十一月には宍粟郡内の梵鐘を調査することができ、一宮町を八十三号、波賀町と千種町を八十四号に、旧宍

粟郡の三河村を中心に八十六号に、平成六年（一九九四）三月に安富町について八十五号に紹介させていただいた。

奈良時代の鏡調査で福井県今立郡池田町に伯牙彈琴鏡を観覧させていただき、続いて高岡鑄物師に伝わった長谷川孫兵衛と京三条釜座の和田吉兵衛との一件の古文書についても見てみたいと思つていたところ、高岡市立図書館で幸運にも希望が叶つた。高岡鑄物師の老子製作所の梵鐘の製作課程についても観覧できたことから『山崎郷土会報』八十七号に宍粟郡の梵鐘集成を試みました。

二 京都知恩院の大梵鐘と長谷川氏について

長谷川氏の梵鐘について調査していると、興味深い事実がわかつた。というのは地元の金谷で伝承とともに藤平忠作「郡内、雑話長谷山遊鶴寺と遊鶴山明源寺、智恩院の鐘と長谷川」『宍粟郷土研究会報』、さは『第三輯昭和九年（一九三四）』によると、寛永十三年（一六三六）の京都知恩院の大鐘を、金屋鑄物師の長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛が播磨鑄物師棟梁の野里鑄物師芥田五郎右衛門と共に参加していることがわかつた。

「寛永十三年（一六三六）に京都市東山区の浄土宗の総本山知恩院の大鐘を鑄造することになったが、諸国の鑄物師三条釜座の和田信濃、近藤丹波など八人が鑄たが、大きすぎて皆失敗している。

長谷川孫兵衛と五郎兵衛の二人は、松の木をえぐって樋を作り、鑄た金を、此の樋に流して鑄型に入れた樋はこげたが金はさめることなく鑄型に流れ込んだ。このことよつて長谷川氏は徳川の紋と長谷川の紋の入った紫の幕と提灯とえふ（絵符・会符）を拝領した。」

とされている。

京三条釜座和田信濃や芥田五郎右衛門はじめ多くの鑄物師が鑄ることをしたが、失敗に終わったので、長谷川氏がこの時に松の木をくりぬいて樋にして埵（梵鐘の鑄型）に流したとされる。この功績が認められたことから徳川三代將軍の徳川家光より特別に可愛がられたという。その後宍粟郡鑄物師として活躍することになった。私はこの事実を確認することから知恩院の大梵鐘を調査するきっかけになった。

三 知恩院の大梵鐘について

知恩院の大鐘については、次のようである。

「知恩院の大鐘は第三十二世雄譽靈巖上人の代の寛永十三年（一六三六）九月に鑄造されたもので、日本三大名鐘の一つといわれ、高さ一丈八尺（約五・五メートル）口径九尺五寸、（約三メートル）厚さ一尺（約三十センチ）重さ一万八千貫（約七十トン）と伝えられている。銘と六字名号は靈巖上人の筆とされ除夜の鐘は有名である。

知恩院鐘については、坪井良平氏の『日本の梵鐘』角川書店に紹介されている。これによると、

「寛永十三年（一六三六）

冶工三条釜座和田出羽掾国久

近藤因幡目藤原信安

近藤美作目藤原宗次

近藤丹波目藤原藤久

辻 伊豆目藤原実次

和田信濃大掾藤原国次

靖大工 近藤美濃少掾入道宗味藤原宗久

岡本甲斐少掾入道浄故藤原国富

とあり、鋳物師名がみえる。

私の平成五年三月二十一日調査では、

「千時 寛永十三年九月十五日

洛陽東山知恩院大谷寺住檀蓮靈巖

冶工三条釜座和田出羽掾国久

近藤因幡目藤原信安

近藤美作目藤原宗次

近藤丹波目藤原藤久

辻 伊豆目藤原実次

和田信濃大掾藤原国次

靖大工 近藤美濃少掾入道宗味藤原宗久

岡本甲斐少掾入道浄故藤原国富

「南無阿弥陀仏」となる。

知恩院の鐘を製作した三条釜座については、坪井良平氏による

と、辻実次は天正（一五七三〜一五九二）から慶長（一五九六〜一

六一五）にかけて天下一釜大工として活躍した辻与二郎実次の子と

される。岡本国富は慶長から元和にかけての著名な大工であり、和

田氏と近藤氏は、江戸時代の鋳物師の代表である。和田氏は、和田

信濃大掾藤原国次（通称吉兵衛）の名を世襲している。寛政五年（一

七九三）三月に上岸田仏心寺の一件でも知られる。宍粟では波賀の

安養寺、一宮の大徳寺、春安の願行寺の喚鐘がある。寛文九年（一六六九）に京都百万遍の知恩寺の鐘を鋳造しているが朝鮮鐘の様式を取り入れている。

近藤氏は近藤丹波掾として慶長十七年（一六一二）の方広寺の大仏殿の風鐸に名が見える。佐用町三日月慶運寺の喚鐘に洛陽釜座近藤丹波藤久の名が刻まれている。このほか三条釜座では、奥田家は奥田大和掾正次として知られる。西村家は京の釜師として知られる。元禄七年（一六九四）は、京大仏住西村左近宗春とある。三条釜座以外で注目されるのは、堀川住筑後大掾と室町住出羽大掾がみえる。室町住出羽大掾は、千種町西蓮寺の双盤に名がみえる。

四 京都知恩院の大鐘について（まとめ）

「寛永十三年（一六三六）に京都市東山区の浄土宗の総本山知恩院の大鐘を鋳造することになったが、諸国の鋳物師三条釜座の和田信濃や近藤丹波など八人が鋳たが大きすぎ皆失敗していた。

長谷川孫兵衛と五郎兵衛の二人は、松の木をえぐって樋を作り、鋳た金を、此の樋を流して鋳型に入れた樋はこげたが金はさめることなく鋳型に流れ込んだ。このことによって長谷川氏は徳川の紋と長谷川の紋の入った紫の幕と提灯とえふ（絵符・会符）を拝領した。」とされている。絵符・会符は、『広辞苑』によると、江戸時代に幕府が特権を許可した荷札である。

知恩院は、寛永十年（一六三三）二月に火災に遇い、十二月に徳川家光の命によって再建されている。そして、三年後の寛永十三年（一六三六）九月に奈良東大寺の大鐘を模して知恩院の鐘を鋳造し

ている。

今回の調査で知恩院の鐘には、長谷川氏の名は見られなかった。知恩院の鐘に参加した事実は、山崎町金谷の地元に伝承があることから長谷川孫兵衛、五郎兵衛の名が拡がることになる。

私は平成五年三月二十一日に京都市左京区東山の知恩院大鐘について、詳しく冶工名なども調査する機会にめぐまれたので概要を紹介させていただいた。浄土宗知恩院派大雲寺住職加藤昭彦氏より詳しくご教示をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

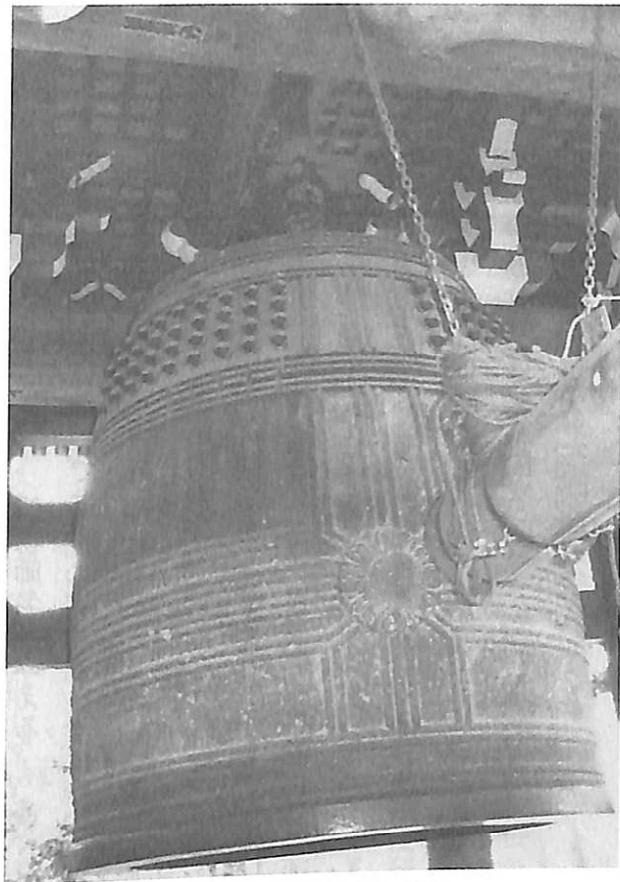


写真1 知恩院の大梵鐘

神戸新聞掲載「世の煩惱に一足早く古都の鐘」二〇〇七年十二月二十八日掲載記事を紹介させていただきます。

「二十七日に京都東山区の知恩院の除夜の鐘の試し突きがあった。鐘は直径二・八メートル、高さ三・三メートル、重さ約七十トン。」

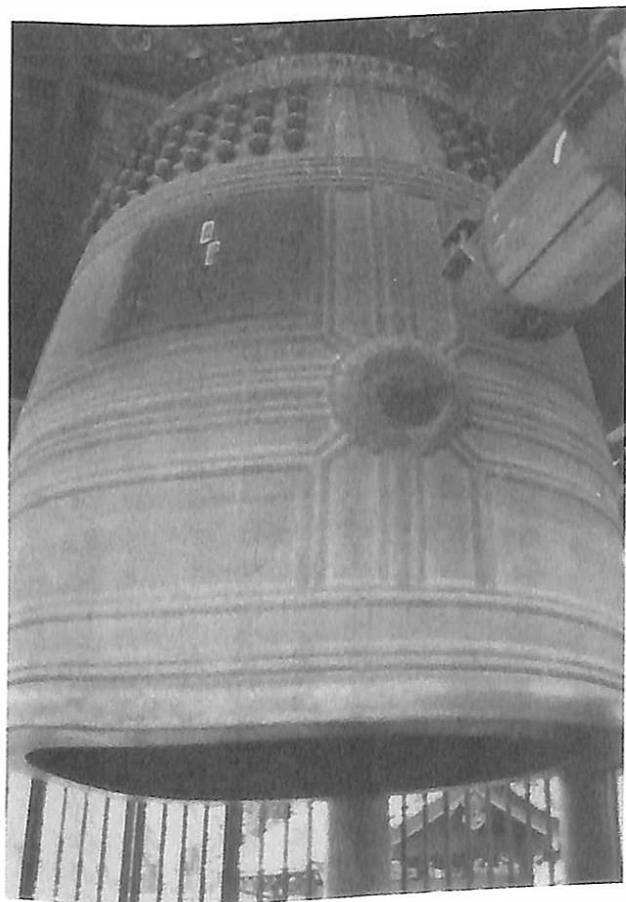


写真3 方広寺の大梵鐘 (京都市東山区)



写真2 東大寺の大梵鐘 (奈良市)

「えーい、ひとつ」「そーれ」のかけ声で、親綱を引く僧侶と十六人の僧侶が一つになって鐘を地面すれすれで鐘を撞く独特の撞き方で一打ごとに南無阿弥陀仏と三回称えます。」

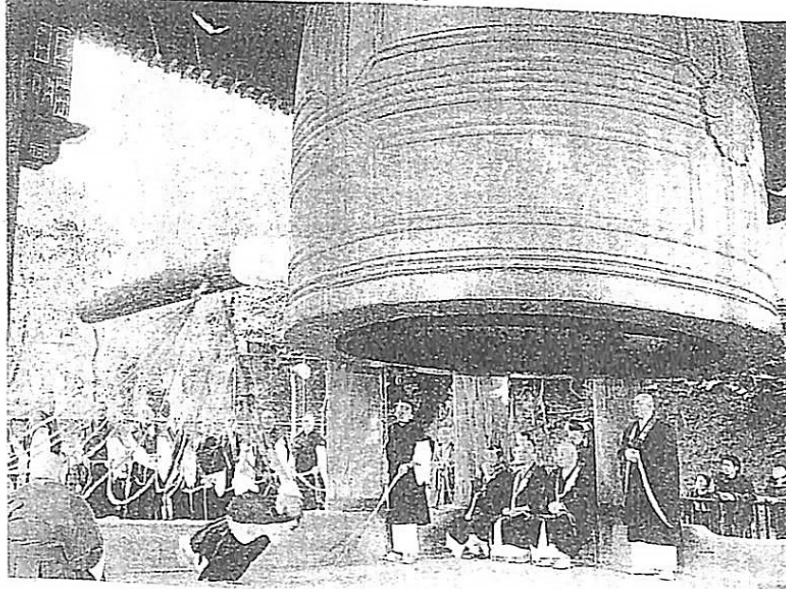
「鐘を突く」と表現されていたことから、神戸新聞社に問い合わせたところ、共同通信の記事で、「新聞辞典」で確認したら「突く」でよいとの回答でありました。突鐘もあるのですがまちがいではない。これは棒を突くのに用いられるが、撞くはお寺の鐘を撞くとされることに用いられることから私もやはり撞くではないかと話したことを今でも覚えています。

ちなみに調べてみますと、除夜の鐘は大みそかに鐘を撞きます。一〇八は煩惱を除くためとされ、宍粟市では数え方もいろいろで餅や大豆や碁石や竹や数珠送りで今はスマホもあります。

令和四年（二〇二二）の知恩院の除夜の鐘の試し撞きは、十二月二十七日で、大みそかの除夜の鐘の前に本番さながらに行われます。除夜の鐘は十二月三十一日二十二時四十分からです。

参考文献 藤平忠作「郡内雑話 長谷山遊鶴寺と遊鶴山明源寺、知恩院の鐘と長谷川」『宍粟郷土研究会報』、さは『第三号昭和九年（一九三四）拙稿「金谷讓尾の観音様と金屋鋳物師長谷川氏について」』『山崎郷土会報』八十九号平成九年（一九九七）四月三十日坪井良平『日本の梵鐘』角川書店昭和四十五年（一九七〇）神戸新聞「世の煩惱に一足早く古都の鐘」二〇〇七年十二月二十八日掲載記事より

除夜の鐘の試し突きで、親綱に身を委ね勢いよく鐘を突く僧侶
=27日午後、京都市東山区の知恩院



世の煩惱に一足早く古都の鐘

京都市東山区の浄土宗総本山・知恩院で二十七日、除夜に備えた鐘の試し突きがあり、日本最大級の梵鐘が一足早く、「ゴーン」という重々しい音を響かせた。

鐘は直径二・八メートル、高さ三・三メートル、重さ約七十トンの青銅製で、江戸時代初期に鑄造。奈良・東大寺、京都方広寺の鐘と並んで日本三大梵鐘の一つとされる。午後、晴る。え

知恩院で試し突き「えーい、ひとつ」「そーれ」の掛け声とともに、僧侶十六人がそれぞれ子綱を引、親綱を牽いだ僧侶一人が地面に倒れ込み、身を委ねて鐘を突くと、空気がヒリヒリと震え、観光客から歓声が上がった。

試し突きに初参加した寺の研修生花田善道さん（二〇）静岡岡原野市出身は「体験して（鐘の迫力の）怖さは消えた。本番でもぜひ突きたい」と笑顔で話した。

神戸新聞 2007年12月28日掲載記事より



京都市東山区知恩院位置図

会員・家族の文芸

◎俳句

枯菊を焚くは詩人が歌詠みか
 冬の夜や祖父が得意の狐譚
 猫交へほのぼの家族小春縁
 風邪の子にいつもに増して母優し
 冬めきぬ街に闊歩のベレー帽
 山茶花の散り敷く日々のはじまりぬ
 蛩がり一会の親し会話かな
 幼な子の手窪に愛し蛩かな
 日向ぼこややうとうとと機嫌よき
 裸木を透かし紺碧空広し
 年の瀬や片付け下手は親譲り
 世の憐れすべて背負や枯芭蕉
 一晚中立ちつづけたる案山子かな
 始めての絵手紙干支の兎描く
 風音や浴びる光の春の色
 目をやれば廃校といふ春景色
 窓ガラス磨きあげれば冬の庭
 叔父を眠らすラーゲリの凍土かな
 (ラーゲリはロシアの収容所)

京屋 伊助
 京屋 伊助
 杉山美保子
 杉山美保子
 三浦 ゆき
 三浦 ゆき
 田中 良子
 田中 良子
 田中 良子
 鳥羽チエノ
 鳥羽チエノ
 鳥羽チエノ
 里見 和樽
 里見 和樽
 里見 和樽
 高井 智代
 高井 智代
 高井 智代
 速水美知代
 速水美知代
 速水美知代
 宗平 圭司
 宗平 圭司
 宗平 圭司

◎冠句 (つた・いさわ・加生・山崎冠句会)

贈り物 父母に貰ったど根性
 注連飾り キリツと空気入れ替わり
 贈り物 紅葉あざやか天うらら
 注連飾り 家族の絆願いつつ
 贈り物 旬の食材大地から
 注連飾り 一年の福願い込め
 贈り物 自分好みのお取り寄せ
 注連飾り 祖父の手ほどき菓をなう
 贈り物 孫が待つてる誕生日
 注連飾り 祝う正月とんど焼き
 贈り物 嬰兒(みどりご) 来たり笑み増えて
 注連飾り 清々しくも朝の雪
 贈り物 心のひだに染み渡る
 注連飾り 歯朶反り返り年明る
 贈り物 見つめて浮かぶあの人
 注連飾り 新しい年迎え入れ
 贈り物 空からヒラリ雪の華
 注連飾り 家族と共に新年を
 贈り物 相手を思い 選ぶ品
 注連飾り コロナも含めた厄除けか
 贈り物 コロナが変えたお付き合い
 注連飾り トンドの中に願い込め
 贈り物 今は送れず気持ちだけ
 注連飾り 今年の幸せ願います

宇田 幸夫
 宇田 幸夫
 坂本 忠彦
 坂本 忠彦
 実友 勉
 実友 勉
 嶋津 千里
 嶋津 千里
 為国真佐行
 為国真佐行
 谷笹 まや
 谷笹 まや
 高井 玲依
 高井 玲依
 高井 玲依
 西家 侑希
 西家 侑希
 西家 侑希
 三木ひづる
 三木ひづる
 三木ひづる
 飯塚 正浩
 飯塚 正浩
 飯塚 正浩
 大谷 志路
 大谷 志路
 大谷 志路
 中瀬 公三
 中瀬 公三
 中瀬 公三

*次号に掲載する文芸作品の投稿をお待ちしています
 併せて新会員を募集しています

事務局だより

編集後記

令和五年度の通常総会について

記

日時 令和五年四月十六日(日) 午後二時より
場所 六粟防災センター四階研修室
議事 一、令和四年度事業報告について
二、令和四年度会計報告について
令和四年度監査報告
三、役員改選について
四、令和五年度事業計画について
五、令和五年度会計予算について

総会終了後、記念講座として、自然と文化のふるさとづくりシリーズ「米づくり」を鑑賞します。

令和五年度の研修旅行中止のお知らせ

毎年実施していましたが研修旅行は、新型コロナウイルスが未だに終息していませんので、令和四年度に続いて、やむをえず中止になりました。

『山崎郷土会報 第一四〇号』をお届けします。

新型コロナウイルスは、未だに終息してなく拡大する状況です。第一四〇号ができるかどうか心配していましたが、皆様のご協力によりいずれも力作が集まりました。

大谷司郎会長は、戦争の遺跡 忠魂碑について(一)で、山崎の忠魂碑についての大作です。高井淳さんは、山崎闇斎先生と会津藩主保科正之について紹介されています。田路正幸さんは、国・県の登録有形文化財の中門前屋と山崎歴史民俗資料館の紹介です。竹内克司さんは、地域伝承 山崎町門前『古屋前野家の由緒』についての貴重な史料をもとに紹介されています。伊藤一郎副会長は、山崎の美術の流れ(五)で、写真と美術協会の総括をされています。里見巨さんは倉吉せきがね里見まつりについての力作です。私は金屋村 鋳物師の長谷川氏が参加した京都知恩院の大梵鐘を紹介しています。それから会員家族の文芸など会員の皆様にとって有益な内容で、これからも皆様の声を届けるようにしたいと思います。

なお、今年卯年です。十二支の四番目です。うさぎのように目標に向かって飛躍の良き年になりますように祈念します。(片山)

追記

今年の一月十四日(土)から三月二十六日(日)まで姫路文学館で歌人安田青風展の企画展があります。没後四十年を記念して開催されます。是非ご覧ください。

外科・内科

山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL 020036

ほっと、ひといき

伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 汗風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1
 TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
 URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO
Meyama
 P.C.S

スタジオウエヤマ

- 山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
 TEL (0790) 62-8027
 FAX (0790) 62-8827

株式会社 安井書店

兵庫県宍粟市山崎町山崎90 〒671-2577
 TEL (0790) 62-0700(代) FAX (0790) 62-0700

E-mail:gaisyo@yasuisyoten.co.jp
 URL:http://www.yasuisyoten.co.jp/

老松酒造有限公司

■老松ダイニング
 発酵と麹の健康ランチ
 定休日:木曜日(予約優先)

■老松販売所
 日本酒・リキュール・麹商品



老松酒蔵見学出来ます

〒671-2577
 宍粟市山崎町山崎12
 電話0790-62-2345



まごころを伝えます。

地酒

一献献上 品質本位



確かな品質と味わい。

SANYOHAI
 山陽盃酒造株式会社
 兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218

E-mail info@sanyohai.com HP http://www.sanyohai.com

- 相続手続時、名義変更に関するアドバイス
- 各種税務手続
 相続税・贈与税確定申告手続 電子申告環境サポート
 所得税確定申告
- 経理自計化のお手伝い
- 法人税・地方税・申告書作成代行
- 経営助言

〒671-2533 兵庫県宍粟市山崎町須賀澤1329-7

高橋利典税理士事務所

税理士・行政書士 高橋利典
 TEL (0790) 63-2150 / FAX (0790) 63-0445



パンフレット・デザイン広告
 名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
 ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
 TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764